若者におけるボランティア活動とその経験効果[1)]

妹　尾　香　織

本研究では、ボランティアが活動を通じて得る喜びや満足感などの心理的効果（援助成果）の規定因と、その効果が後の活動に与える影響を、ボランティア活動経験のある若者（157名）を対象に質問紙調査によって検討した。

その結果、（1）若者はボランティア活動から、“自己報酬感”、“愛他的精神の高揚”、“人間関係の広がり”の3つの援助成果を得ていること、また、（2）ボランティア活動の援助効果や社会効果が援助成果を規定すること、さらに、（3）援助成果がボランティア活動継続を動機づけること、が明らかとなった。

キーワード：ボランティア活動、援助成果、ボランティア活動継続の動機づけ、若者

This study investigated the factors of helping effects caused by volunteer activities on the volunteers and influences of these effects on the volunteer's subsequent behaviors, by conducting questionnaires to young volunteers (*N*=157). The results of the investigation showed that: (1) volunteers obtained the following three helping effects through volunteering: “feeling of self reward”; “raising of altruism”; and “spread of human relationship”; (2) affirmative evaluation of their own helping behaviors defined helping effects on volunteers; and (3) the helping effects motivated the continuance of volunteer work.

Key words : Volunteer work, Helping effects for helpers, Motivation to continue volunteer work, Young people

問　題

昨今の援助行動と若者の生き方に関する社会的な議論のひとつに、ボランティア活動の義務化の問題がある（ボランティア白書2003編集委員会, 2003）。初等、中等、高等教育の現場では、ボランティア活動と関連する授業が導入され、また多くの大学が、積極的に学生のボランティア活動を支援し、カリキュラムに導入している（水上、2003）。しかしながら、学習の一環で経験した援助行動（ボランティア活動）の経験が、その後どのように生かされ、活動が持続し、発展しているのかについては、十分に研究されているとは言えない。

ボランティア活動を含む援助行動の動機づけの問題は、近年の援助研究の重要な課題となっている（Pilivian & Charng, 1990; 妹尾, 2005）。高木（1982）によれば、ボランティア活動（行動）は、他者のために自分のお金、血液、労力、時間などを寄付・提供する“寄付・奉仕活動群”に所属し、過去の援助経験の良し悪しと、社会的規範に基づく援助責任の受容・拒否がその重要な規定因になる。ボランティア活動（行動）への参加の動機、原因、理由は複雑であり、愛他心とともに個人的関心が存在することが明らかにされている（Clary & Orenstein, 1991；Clary＆Snyder, 1991; Clary, Snyder, Ridge, Copeland, Stukas, Haugen & Miene、1998；（財）内外学生センター, 1999；Oda, 1991）。また、活動の継続には、ボランティア活動の負担（コスト）に耐えることができる、いくらか利己的な欲求の存在が必要で

あることも示唆されている（Snyder & Omoto、1992；Winniford, Carpenter & Grider, 1995）。

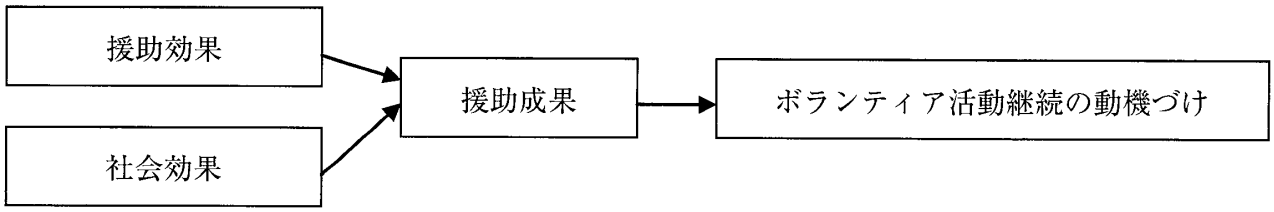
しかしながら、従来の研究知見に基づく動機の枠組みでは、今日のボランティア活動（行動）は十分説明できないとも指摘されている（渥美、2003）。また、ボランティア活動（行動）には無償性や連帯性や自発性が共通して存在すると論じられてきたが、この概念の確立は未だなされていないのが現状である（佐々木、2003）。そのため、ボランティア体験者に及ぼす活動経験の心理的・社会的効果に着目した、活動継続を規定する要因の検討が必要であると考える。

さて、若者がボランティア活動を経験したことによる影響については、災害時のボランティア活動に関する報告がある（例えば、大橋・北風・佐々木・宗・宮崎、2003；高木・玉木、1996）。高木・玉木（1996）は、阪神・淡路大震災時に活躍した若者ボランティアが、活動することで人間性、社会・地域、自然について活動以前とは異なる認識をもつようになったとする認識変化や、忍耐力、責任感、共感性が高まったとする自己変革を報告している。また、佐々木（2003）は、大学生が、援助の必要性や貢献の可能性が緊急場面とは異なる平常時のボランティア活動についても満足感を得ることを明らかにしている。しかしながら、なぜ若者がそのようなポジティブな心理的効果を得ているのか、ポジティブな心理的効果が若者の将来にどのような影響を与えるのかという、ボランティア活動（行動）の影響出現過程は明らかにされていない。

ところで、ボランティア活動には、1）誰が、なぜ援助するのかに関する段階、2）現実の相互作用の段階、3）ボランティア自身や彼らに関わる社会的ネットワークや社会全体において変化が起こる段階、の3過程がある（Snyder & Omoto、1992）。Snyder & Omoto (1992) は、エイズ患者に対して活動するボランティアを系統的に分析した結果、援助的な性格特性はボランティア活動の継続とは無関係であること、活動参加時のボランティア活動動機や活動による満足感がボランティア活動継続や知覚された態度変容を規定することを明らかにしている。また、妹尾・高木（2003）は、ボランティア活動を経験した後にボランティア自身が得る喜びや満足感などの援助成果[2]に注目し、援助成果の規定因と援助成果の機能を検討した。その結果、ボランティア活動が有効であったかどうかの援助の効果認識が、活動の対象者に対する効果である援助効果と社会に対する効果である社会効果とに分けられ、それらが有効であったと認識されるほど、援助成果は得られやすく、また、援助成果が得られるほど、その後も活動を継続したいと強く動機づけられ、さらに、活動を継続したいと動機づけられるほど、現実にボランティア活動を行うという過程を明らかにしている。しかしながら、この結果は、居住地域を中心にボランティア活動を継続している高齢者ボランティアを対象にした調査から得られたボランティアの内的心理過程であり、これが若者においても認められるかどうかは明らかでない。

そこで、本研究では、非緊急場面におけるボランティア活動に着目し、ボランティア活動の援助効果や社会効果が援助成果を規定し、さらに、この援助成果がボランティア活動継続を動機づけるという一連の過程（妹尾・高木、2003）を、若者を対象に検討する（Figure 1）。なお, 本研究では、ボランティアの概念や動機に関する前述の問題指摘に基づき、カリキュラムの一つとして学生に求められているボランティア活動の効果・影響も研究対象とし、若者におけるボランティア活動経験とその影響を検討する。

Figure 1. ボランティア活動による影響出現過程



方　法

調査対象者と手続き

福祉系専門学校生を被調査者として質問紙調査を実施した。調査は、2002年1月に、授業中に教室内で集団的に実施した。回答に要した時間は、15分程度である。有効回答者数は163名でその性別内訳は、男性55名（33.7%）、女性108名（66.3%）である。彼らの平均年齢は20.0歳（*SD*=1.87）であった。

質問紙の構成[3)]

（1）**ボランティア活動経験の測定**　ボランティア活動を、“人や社会のことを気づかい、彼らのために優しい、好意的な気持ちで行う活動”と定義し、“過去に行ったことがあるが、現在は行っていない”、“現在行っている”、“行ったことがない”の中から一つ選ぶように求めた。そして、ボランティア活動経験のある回答者には、活動期間と活動内容を自由記述するように求めた。なお、ボランティア活動経験がある人で複数の活動経験を持つ人の場合、そのうちで最も力を入れている（入れていた）活動を一つ選んでもらい、選んだ活動について以後の質問に回答するように求めた。

（2）**援助効果、社会効果の測定**　援助効果を“自分の活動が、対象者の役に立ったと実感した”、社会効果を“自分の活動が、社会にとって有益であったと実感した”で定義し、その程度を、“非常にあてはまる”（5点）から“まったくあてはまらない”（1点）までの5段階で評定させた。得点が高いほど、それぞれの効果が高いように配点した。

（3）**援助成果の測定**　妹尾・高木（2003）の援助成果測定尺度の17項目を使用した。援助成果測定尺度は、以下の3つの下位尺度から構成されている。愛他的精神の高揚（4項目）は、援助経験による向社会性の芽生えを測定する下位尺度である。例えば、“人や地域に貢献しようという気持ちが芽生えた”や“日常生活の中で人との対応が好ましい方向に変わった”などの項目からなる。人間関係の広がり（4項目）は、援助を契機とした人間関係の広がりや人と人との好ましい触れあいを測定する下位尺度である。例えば、“活動そのものが楽しめた”や“仲の良い友達ができた”などの項目からなる。人生への意欲喚起（3項目）は、援助を通じての自己のポジティブな内面変化を測定する下位尺度である。例えば、““もっと～したい”など自分自身を高める目標が生まれた”、“気持ちの充足感が生まれた”などの項目からなる。各下位尺度の内的整合性は、α=.77～.86の範囲にある。質問形式は、自己のボランティア活動からそれらの成果が得られた程度について、“非常にあてはまる”（5点）から“まったくあてはまらない”（1点）までの5段階で評定することを求めた。そして、得点が高いほど、各援助成果が一層得られているように配点した。

（4）**活動継続の動機づけの測定**　ボランティア活動を継続する意図を、“ぜひ継続したい”（5点）から“まったく継続したくない”（1点）までの5段階で評定することを求めた。そして、得点が高いほど、ボランティア活動継続の動機づけが高くなるように配点した。

結　果

ボランティア活動経験

回答者のボランティア活動経験は、“過去に行ったことがあるが、現在は行っていない”が145名（89.0%）、“現在行っている”が12名（7.4%）、“行ったことがない”が6名（3.7%）であり、彼らのほとんどがボランティア活動を経験していた[4)]。具体的に、そのボランティア活動は、福祉施設内での生活介助や子供や障害者、老人を対象としたイベント活動などを一日もしくは数日間経験するというものであった。この結果は、大学生が平常時に参加するボランティア活動の中心は福祉領域であったという佐々木（2003）の結果と類似している。

大学生のボランティア活動実態の調査結果[5)]（（財）内外学生センター、1999）と比較すると、活動経験のある人の割合では、本調査の活動経験者の割合は高いが、現在活動中の学生の割合は

7％程度であり、一般的な若者のボランティア活動経験のそれと一致している。

なお、分析では、ボランティア活動経験のない6名を除く157名を分析対象とした。

援助成果の構造解明

ボランティア活動を経験して得た援助成果の構造を明らかにするために、援助成果尺度の17項目について、主因子法、バリマックス回転で因子分析を行った。明確な負荷を示さない項目（8．“やりがいが生まれた”、9．“対象者や他のボランティアから様々なことを教えられ勉強になった”、10．“気持ちの充足感が生まれた”、11．““もっと～したい”など自分自身を高める目標が生まれた”、12．“活動が生活の中で重要な部分となり、自分のものとなった”、14．“自分に出来ることで社会と関わり、人の役に立つことができた”）を除いて、11項目で再度主因子法を用いて因子分析し、得られた各因子の固有値（初期解における固有値の減少傾向は、第Ⅰ因子から第Ⅳ因子まで、5.92、1.00、.91、.58）を参考にして、3因子を抽出した。まず、因子分析の結果（Table 1）に基づいて、因子の解釈と命名を行う。

第Ⅰ因子に高い負荷を示す項目は、“活動を通じて自分自身が成長できた”、“活動を通じて喜びや感動を経験した”、“活動そのものが楽しめた”などであり、これらは、ボランティア活動の経験が自分自身に成長や満足をもたらしたことで共通していることから“自己報酬感”と命名した（6項目、α=.89）。

第Ⅱ因子に高い負荷を示す項目は、“人や社会に貢献しようとする気持ちが芽生えた”、“対象者の幸福・安寧のための新たな目標が生まれた”、“日常生活の中での人との対応が好ましい方向に変わった”であり、これらは、他者のためと自分の行動や認識が愛他的になる点で共通しており、“愛他的精神の高揚”と命名した（3項目、α=.85）。

第Ⅲ因子に高い負荷を示す項目は、“仲の良い友達ができた”、“新しい出会いがあり、人間関係の輪が広がった”であり、これらは、人間関係が充実した点で共通しており、“人間関係の広がり”と命名した（2項目、α=.70）。愛他的精神の高揚と人間関係の広がりの2因子は、高齢者ボランティアを対象とした妹尾・高木（2003）で得た結果とほぼ同じ項目で構成されたが、第Ⅰ因子の“自己報酬感”は、本研究で新たに発見された因子である。

ボランティア活動による影響出現過程の検討

まず、援助効果、社会効果が援助成果に及ぼす影響を検討するために、援助成果全体と援助成果の因子分析で得た3つの因子得点のそれぞれを目的変数とし、援助効果得点と社会効果得点を説明変数とする重回帰分析を行った。つぎに、援助成果がボランティア活動継続の動機づけに及ぼす影

Table 1　援助成果の構造（因子分析結果：回転後因子負荷行列、N=151）

	質問項目	平均値（SD）	FⅠ	FⅡ	FⅢ	共通性
4	活動を通じて自分自身が成長できた	4.12 (.86)	**.759**	.231	.110	.631
5	活動を通じて喜びや感動を経験した	4.04 (1.06)	**.736**	.343	.296	.747
3	人に対して思いやることが意識づいた	4.15 (.84)	**.634**	.344	.211	.565
6	対象者や他のボランティアから様々なことを教えられ勉強になった	3.94 (1.01)	**.612**	.229	.211	.471
2	活動そのものが楽しめた	4.07 (.96)	**.604**	.316	.318	.565
7	必要とされていることが実感でき、自信につながった	3.48 (1.06)	**.541**	.358	.317	.522
17	日常生活の中での人との対応が好ましい方向に変わった	3.61 (.96)	.356	**.703**	.184	.655
16	人や地域に貢献しようという気持ちが芽生えた	3.40 (.96)	.301	**.703**	.154	.608
15	対象者の幸福・安寧のための新たな目標が生まれた	3.46 (.96)	.298	**.653**	.371	.653
1	仲の良い友達ができた	2.60 (1.27)	.151	.165	**.701**	.542
13	新しい出会いがあり、人間関係の輪が広がった	3.04 (.96)	.390	.262	**.687**	.692
	因子負荷の2乗和		3.03	2.08	1.55	
	寄与率（%）		27.56	18.91	14.08	

注）回答は1＝まったくあてはまらない、3＝どちらともいえない、5＝非常にあてはまる

響を検討するために、援助成果を説明変数とし、ボランティア活動継続の動機づけ得点を目的変数とする重回帰分析を行った。そして、変数間の相関関係をTable 2に、重回帰分析結果をTable 3に示した。

まず、援助成果全体では、援助効果と社会効果が正の有意な影響を及ぼしていた。

つぎに、成果別に見ると、“自己報酬感”へは、援助効果が正の有意な影響を及ぼしていた。“愛他的精神の高揚”へは、援助効果が正の影響を及ぼす傾向が示された。“人間関係の広がり”へは、援助効果も社会効果も有意な影響を及ぼしていないことが明らかとなった。

ボランティア活動継続の動機づけへは、援助成果のすべてが有意な影響を及ぼしていた。

考　察

本研究は、若者ボランティアを対象に、ボランティア活動が彼ら自身に対して影響を与える過程を検討した。その結果、妹尾・高木（2003）が高齢者を対象に明らかにしたボランティア活動の効果と成果の規定関係が、若者においても認められることが明らかとなった。すなわち、高齢者と同様に若者も、ボランティア活動の経験を通じて援助成果を得ており、援助成果を得るほどボランティア活動継続が動機づけられることが明らかとなった。つまり、活動参加が自発的な意思決定によるかどうかにかかわらず、ひとたび活動に参加し、その活動を通じて自らの行動の役立ちが実感できれば、活動に満足し、以後ボランティア活動を継続することが示唆された。

若者がボランティア活動経験で得ていた成果とは、“人に対して思いやることが意識づいた”、“活動を通じて自分自身が成長できた”、“対象者や他のボランティアから様々なことを教えられ勉強になった”といった、自分自身の成長に関する成果であることが分かった。この結果は、災害時のボランティア経験（高木・玉木、1996）や平常時のボランティア経験（佐々木、2003）から若者が得たものとほぼ一致している。しかしながら、妹尾・高木（2003）の高齢者のボランティア活動

Table 2　尺度得点の平均と変数間の相関関係（*N*=144）

	平均値（*SD*）	1）	2）	3）	4）	5）	6）	7）
1）援助効果	3.64（ .92）	−						
2）社会効果	3.28（ 1.03）	.46**	−					
3）成果①自己報酬感	.00（ .88）	.40**	.32**	−				
4）成果②愛他的精神の高揚	.00（ .85）	.22**	.21*	.17*	−			
5）成果③人間関係の広がり	.02（ .82）	.22**	.27**	.11	.14	−		
6）援助成果	61.50（12.58）	.49**	.42**	.72**	.66**	.54**	−	
7）ボランティア活動継続の動機づけ	3.62（ .92）	.21*	.12	.31**	.47**	.35**	.58**	−

注1）援助成果は援助成果尺度の17項目の得点を合計して求めた.
注2）**$p<.01$,*$p<.05$

Table 3　援助成果およびボランティア活動継続の動機づけを規定する要因の重回帰分析結果

目的変数	説明変数	β	R^2	F値
成果①自己報酬感	援助効果	.33***	.18	16.10***
	社会効果	.16+		
成果②愛他的精神の高揚	援助効果	.15+	.07	5.10**
	社会効果	.14		
成果③人間関係の広がり	援助効果	.12	.08	6.02**
	社会効果	.20		
援助成果	援助効果	.37***	.29	28.51***
	社会効果	.25**		
活動継続の動機づけ	自己報酬感	.21**	.36	27.66***
	愛他的精神の高揚	.41***		
	人間関係の広がり	.27***		

注1）***$p<.001$, **$p<.01$, *$p<.05$, +$p<.10$

において特徴的であった、“仲の良い友達ができた”、“新しい出会いがあり、人間関係の輪が広がった”、といったボランティア活動経験を契機とした人間関係の広がりに関する成果は、若者の場合は得られていないことが分かった。これは、妹尾・高木（2003）で対象としたボランティアが平均8年という長期間にわたり活動を継続していたのと比べて、今回調査した若者の多くが数日の参加で完結するボランティア活動に参加していたことによる違いと考えられる。一方、“対象者や他のボランティアから様々なことを教えられ勉強になった”、“活動を通じて喜びや感動を経験した”といった成果は年齢やボランティアの内容と関連なく得られる成果であることが示唆された。

援助成果の構造を検討した結果、若者においては、“自己報酬感”、“愛他的精神の高揚”、“人間関係の広がり”の3因子が得られ、妹尾・高木（2003）の高齢者のボランティアと部分的に援助成果の構造が異なることが明らかとなった。すなわち、自分自身の成長や活動経験による喜びや感動の“自己報酬感”は、高齢者において明確な負荷を示さなかった項目と、人間関係の広がりとされた項目を含めて新たに構成された。一方、高齢者において、自分自身を高めようと奮起する“人生への意欲喚起”は、若者においては因子として抽出されなかった。こうした援助成果の構造の差異は、回答者のボランティア活動内容が、高齢者と同様に、高齢者や子供、障害者など福祉領域を中心とした活動であったことから、活動内容による差異ではないと考えられる。日常生活における若者の援助成果経験を検討した妹尾（2003）によれば、若者においては成功的援助行動経験が彼らに教育的効果をもたらす点が特徴といえる。高齢者と若者の間の援助成果の構造の差異については、今回の調査だけでは明らかにできないため、今後の課題と考える。

つぎに、ボランティア活動によるボランティアの内的心理過程を分析したところ、若者においても、援助成果全体では、援助効果や社会効果といった他者への援助の効果が援助成果を規定することが明らかとなった。しかし、援助成果別に見れば、援助効果や社会効果の働きは一様でないことも分かった。つまり、今回の分析から、若者は、自らが行った援助授与が目前の相手（被援助者）だけでなく、社会全体に効果が及ぶかということよりも、目前の被援助者に及ぶ援助の効果で自らの経験の良し悪しを決めることが示唆された。また、若者においても高齢者と同様に、援助成果がボランティア活動の継続を動機づける心理的な中核的要因であることが確認された。しかしながら、現在ボランティア活動を行っている若者は、平均して7％程度であり、活動継続の規定因に関する検討も、まだまだ十分とはいえない。

佐々木（2003）によると、若者がボランティア活動参加の障害として最も多くあげたのは、時間的なコストであった。高木・妹尾（2003）は、時間的、金銭的、精神的なコストが高い援助ほど、援助行動後の援助者の心理的反応は、ポジティブな側面もネガティブな側面も大きいことを明らかにしている。したがって、コスト要因を含めてボランティア活動経験の効果や影響を今後さらに検討する必要があると考える。

参考文献

渥美公秀　2003　ボランティアの動機を問うということ　佐々木正道（編著）大学生とボランティアに関する実証的研究　Pp.99－114。
(Atsumi, T)

ボランティア白書2003編集委員会　2003　特集「奉仕活動の推進」時代における青少年のボランティア活動　ボランティア白書2003編集委員会（編）　ボランティア白書2003―個がおりなすボランタリー社会―　Pp.21－88。社団法人日本青年奉仕協会 (JYVA).
(Editorial department of a volunteer white paper in 2003)

Clary, E.G., &Orenstein, L. 1991 The amount and effectiveness of help : The relationship of motives and abilities to helping behavior. *Personality and Social Psychology Bulletin, 17*, 58－64。

Clary, E.G.&Snyder, M. 1991 A functional analysis of altruism and prosocial behavior : The case of volunteerism. In Clark, M.S. (Ed.), *prosocial behavior. Newbury Park* : Sage publications.

Clary、E G., Snyder, M., Ridge, R.D., Copeland, J., Stukas, A.A., Haugen, J., & Miene, P. 1998 Understanding and assessing the motivations of volun-

teers：A functional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, *74*. 1516－1530.

水上徹男　2003　地域社会とボランティア活動―社会財の活用と互恵性の展開―　佐々木正道（編著）大学生とボランティアに関する実証的研究　Pp. 3 －21。
(Mizukami, T.)

(財) 内外学生センター　1999　「学生のボランティア活動に関する調査」結果について　大学と学生、*409*、56－61。
(Center for domestic and foreign students.)

Oda, N. 1991 motives of volunteer work s: self－and other－oriented motives, *Tohoku Psychological Folia*, *50*, 55－61.

大橋健一・北風公基・佐々木正道・宗正誼・宮崎和夫 2003 阪神・淡路大震災における大学生のボランティア活動に関する意識と実態　佐々木正道（編著）大学生とボランティアに関する実証的研究　Pp.117－187。
(Ohashi, K., Kitakaze, K., Sasaki, M., Soh, M. & Miyazaki, K.)

Omoto, A.M., &Snyder, M. 1995 Sustained helping without obligation：Motivation、longevity of service、and perceived attitude change among AIDS volunteers。*Journal of Personality and Social Psychology*, *68*, 671-686.

Pilivian, J. A. & Charng, H. 1990 Altruism : A review of recent theory andresearch. *Annual Review of Sociology*, *16*, 27－65.

佐々木正道　2003　大学生のボランティア活動と受け入れ施設・団体の対応に関する意識と実態　佐々木正道（編著）大学生とボランティアに関する実証的研究　Pp.221－298。
(Sasaki, M)

妹尾香織　2003b　援助成果経験状況の予備的検討－若者の援助成果経験の事例－　関西大学大学院人間科学、*59*、207－221。
(Senoo, K. 2003 An preliminary study on situations of helping effects for helpers：An case study of helping effects for helpers on young. *The Graduate Course of Kansai University Human Science*, *59*, 207-221.)

妹尾香織　2005　援助行動経験が果たす心理・社会的機能に関する研究　関西大学大学院社会学研究科博士論文（未公刊）
(Senoo, K. 2005 A Study of psycho-social functions of helping behavior (Unpublished Doctoral Dissertation of Kansai University))

妹尾香織・高木修　2003　援助行動経験が援助者自身に与える効果－地域で活動するボランティアに見られる援助成果－　社会心理学研究、*18*、106－118。
(Senoo, K. & Takagi, O. 2003 The effect of helping behaviors on helper : A case study of volunteer work for local resident welfare. *Japanese Journal of Social Psychology*, *18*, 106－118.)

Snyder, M., & Omoto, A.M. 1992 Who helps and Why? The Psychology of AIDS Volunteerism. In Spacapan、S., & Oskamp, S. (Eds.) 1992 *helping and being helped : Naturalistic studies* (pp.213－239). Newbury Park, CA : Sage.

高木修　1982　順社会的行動のクラスターと行動特性　年報社会心理学、*23*、137－156。
(Takagi, O.)

高木修・妹尾香織　2003　高齢者における援助行動経験の心理的効果に関する社会心理学的研究　豊かな高齢社会の探究、*11*、1 －31。
(Takagi, O. Senoo, K.)

高木修・玉木和歌子　1996　阪神・淡路大震災におけるボランティア-災害ボランティアの活動とその経験の影響-関西大学社会学部紀要、*28*、1 －62。
(Takagi, O. &Tamaki, W. 1996 Volunteers in the Great Hanshin-Awaji Earthquake:Their works in the disaster and the effects upon the attitude toward the volunteering, *Bulletin of the Faculty of Sociology, Kansai Univercity*, *28*, 1-62.)

Winniford, J.C., Carpenter, D.S. &Grider, C. 1995 An Analysis of the Traits and Motivations of College Students Involved in Service. *Journal of College Student Development*, *36*, 27－38.

注

1）本研究は、関西大学大学院社会学研究科に提出した博士論文の一部を加筆・修正したものであるまた、本研究の一部は、The 28th International Congress of Psychology (2004) において発表した。

2）援助成果とは、向社会的行動において、他者との相互作用を通じて、援助者自身が認知する心理・社会的な内的報酬である（妹尾・高木、2003)。

3）この調査には、このほかにも質問項目があるが、今回の分析では使用しないので省略した。

4）ボランティア活動の経験がある回答者が全体の96.3%と大きな割合であった理由は、調査対象となった専門学校において、ボランティア活動の体験を実習の一環として学校が推進していることにあると思われる。また、ボランティア活動の内容が福祉領域であった理由は、回答者が福祉分野を学ぶ専門学校生であり、学外からのボランティア派遣依頼を受け、学内で紹介されるボ

ランティア活動が、老人保健施設や精神保健施設、あるいは保育園内における活動であったためと思われる。

5）（財）内外学生センターは、文部省（現在の文部科学省）の委嘱により生涯学習活動の促進に関する研究開発として、全国98の大学に在籍する１万人の学生を無作為抽出し、大学生のボランティア意識と実態に関する調査研究を実施している。